

本日の箇所は、イエス・キリストについてこう記しています。「人間について誰からも証ししてもらう必要がなかった。イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたからである」。イエスは、私達人間のことを誰よりもご存知で、私達がどのような存在で、何を思い、何を求めているのか、誰からも教えてもらう必要のない方であると聖書は示しています。逆に言えば、この主イエスから、私達は自分のことを教えてもらうことができるということでもあります。

ボンヘッファーというドイツ人神学者がいます。彼はナチス政権の時代、ヒトラーに反対し、捕らえられ、処刑されていきました。彼が、獄中で残した『私は何者か』という手記が遺されています。その中で彼は、他者から与えられる自分の評価と、それとは正反対の不安や憎しみや絶望感に押しつぶされそうな心の内との間に立ち、「私は何者か？私は本当に、他の人々が言うような者なのか？それとも自分が知っているような者でしかないのか？」と問うていきます。そして最後にこう綴ります。「私は何者か？ただひとりでこう問う時、その問いは私を嘲る。私は何者であれ、ああ神よ、あなたは私を知り給う。私はあなたのものだ」。ボンヘッファーは、様々に揺れ動く自分の存在価値を、神の眼差しから捉え直していこうとするのでした。

私達は、ともすると、各々が置かれた環境の中で定められた評価基準によって、為替相場のように日々変動する自分の存在価値に翻弄されてしまうことがあるかもしれません。しかし聖書は、イエスが私達をどう見ているのかに、その心を向けさせようとしています。イエスは、ご自分のなさったしるしを見て信じようとした人々を「信用されなかった」とあります。人々が、イエスの十字架を前に恐れをなし、見捨て、逃げ去っていく、その心を知り抜いておられたからです。

しかし、その私達の心を見抜かれる主イエスの眼差しには、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである(3:16)」という、神の眼差しが重ね合わされていることを福音書記者ヨハネは記しています。私達の心の内を見抜かれ、露わにしつつ、私達が神に愛されている価値ある存在であることを知っていて下さる主イエスの言葉。この言葉を、一週間を生きる中で消すことがありませんように。主イエスが見てくださるように自分を見ることができますように、祈り求めつつ、歩んで参りたいと願います。

(文責：望月達朗牧師)

